

横浜市立 北山田小学校 学校評価報告書 (令和元～3年度)

重点取組分野	令和元年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
生きてはたらく知	①算数科におけるコース別学習に取り組み、子ども一人一人に合った学習を実現する。②重点研究のテーマを「探求的な活動を通して身の回りのひと・もの・ことに本気でかかわる生活科、横浜の時間」とし、教科横断的に取り組む活動を通して、主体的に学習しようとする態度を養う。	①算数科でコース別学習を行ったことで、子どもの実態に合わせた授業を実現できた。また、チームで学年全体を指導する環境づくりにもつながった。②生活科・総合的な学習の時間では、児童が本気になって主体的に取り組めるような教材や手立てについて研究を深めることができた。	A
豊かな心	①フレンドチーム活動、幼稚園・保育園との年間を通じた交流、地域の方との学習、学年同士の交流など他者と「つながる」教育を通して、「ありがとう」と言える、言われる経験を積み重ね、自尊感情、自己肯定感を育む。②Y-Pアセスメントを実施し、他を思いやる温かい学級風土を作る。	①フレンドチーム活動、幼保小連携授業、普段の授業での異学年交流などさまざまな年齢の子どもと「つながる」活動を通して自尊感情、自己肯定感を育む活動を積み重ねることができた。②Y-Pアセスメントを実施し、よりよい集団作りをする横浜プログラムを行うことで子どもたちのクラスの居心地をよくしようと努めることができた。	A
健やかな体	①地域人材の協力を得て、持続可能な運動や体操を継続して行い、体力と自己効力感の向上に取り組む。②養護教諭による性に関する授業や学校医を招き、話を聞くことを通じて自分の体について知る機会をもつ。③オリンピック・パラリンピックを活用し、運動の推進、障害者理解を推進する。	①自分の体力・運動に親しむよい機会になった。②養護教諭や学校医による専門的な話を聞くことで自分の体についての理解を深めることができた。③アスリートを講師として招くことで、身近にオリンピック・パラリンピックを実感することができた。障害者理解や運動の楽しさに触れるきっかけになった。	A
児童生徒指導	①全学年で教科担任制を取り入れ、一人の児童に対して複数の教員が関わり、その子のもつ様々な側面を捉えながら、児童指導に生かすようにする。②多様化・複雑化する課題にも、チームによる指導で適切かつ迅速な対応ができるようにする。	①多くの職員で指導にあたることで、より深く児童を理解することができた。様々な場面で見せる児童の良い面を共有することができた。②チームで情報を共有しながら組織的に対応することで、課題を未然に防止したり、問題を早期に解決することができた。	A
特別支援	①関係機関との連携を図り、個に応じた指導を行えるようにする。②子どもの特性の理解を深め、得意なことを引き出す支援につなげることで、自尊感情を育む。③個別の指導計画を作成し、子どもに関わるすべての教職員の共通理解を図るようとする。	①通級指導教室や北部療育センター、区役所等の機関と連携をとりながら、児童をより良い支援につなげることができた。②研修を通して児童の特性の理解を深め、個々に適した声掛けや支援を行うことができた。③支援計画の評価・修正をしながら、次年度にも活かせる具体的な支援計画を作成した。	B
ICT活用	①プログラミング教育を先行実施し、論理的思考力を育てる。②ICT支援員と連携し、積極的にICTを活用した授業を計画し、子どもの情報活用能力を高める。③各教室にデジタル教科書を設置・活用することで、子どもの学習意欲を高める。	①各学年・ブロードでのプログラミング教育を実施。三年生以上では年2回以上行った。②子どもの使用率を向上し、情報収集能力が高くなった。情報の収集だけでなく整理・分析する力をより高めた。③デジタル教科書を活用することで、学習意欲を高め理解を深めることができた。	A
地域連携	①幼保小中合同引き取り訓練では、近隣の幼稚園、保育園中学校と連携することで、災害の状況を想定した訓練を行う。②地域の中の学校を実践するために地域の人材を積極的に活用する。③まちは、学校運営協議会、学校便り、学校HP等を活用して地域と「つながる」教育を行う。	①中学校ブロック合同で行うことで、実際に災害が起こった場面を想定しながら引き取り訓練を行うことができた。②各教科の単元で連携を取り合いながら、積極的な活用ができた。③様々な機会を通して、学校の取組に対する理解と協力を得ることができた。	B
#REF!	#REF!		
#REF!	#REF!		
いじめへの対応	定期的なミニ面談やYPの実施等により学級における子どもの居場所づくり・絆づくりを進め、いじめの未然防止に努める。②児童の変化に気付くアンテナを高くもちながらいじめの早期発見に努め、児童や保護者に寄り添って早期解決を図れるようにする。	①定期的なミニ面談やアンケートの実施により、児童のもつ様々な悩みに寄り添うことができた。YPに関しては、次年度からは年間計画を立てながら取り組む。②多くの職員で児童を見守り、小さな変化も共有しながら指導にあたることで、いじめの未然防止や早期発見・解決につなげることができた。	B
人材育成・組織運営(働き方改革)	①チームマネージャーを活用した教科担任制を行うことで、学年の組織を強化すると共に複数の担任による教材研究や保護者対応を進められるようにする。②メンターチームでは、すぐに役立つ内容の研修を取り入れ、学級経営や授業に生かすことができるようにする。③教務会を活用し、全体を見通した学校経営を行えるようにする。	①チームマネージャーを中心に、効率的に時間割を組み立てたり、チームで保護者対応に取り組んだりすることができた。②メンバーが主体的に研修を進め、年間通じて学びの多い研修になった。③教務会で必要な情報を共有し、管理職と方向性を確認することができた。教務部を中心として円滑な学校運営を行うことができた。	A
ブロック内評価後の気づき	今年度は、小中一貫や学校運営協議会に管理職ばかりでなく一般の教職員を巻き込もうと様々な取り組みを行った。 ・学校運営協議会主催で「15歳のバトン」という演題で小中合同の講演会を催した。 ・小中の一般の教職員が意見交換できる場を設けた。 ・人権研修を小中合同で行った。ラポールから講師を呼んで、ポッチャ・車いすバスケットを体験する場を設けた。		
学校関係者評価	昨年度の反省から、小中ブロック各校の学校評価の項目に同じ質問項目を設けた。自己肯定感、自尊感情を測定することで、ブロックの児童生徒に役立てようとの意図を評価していた。小中ブロック4校「あゆみ」連絡網の内容を共有した。現在は形式も評価の有無等も各校でそれぞれだが、学習指導要領も変わり、評価項目も変わるタイミングで、4校の評価の仕方を参考に、今後の方針を定めてはどうかというご意見をいただいた。		
中期取組目標振り返り	来年度からの指導要領の改訂に伴い、プログラミング教育が必修化される。秋に行った公開授業では350名ほどの参加者が本校の実践を視察し、多くの学校関係者に影響を与える取り組みとなった。働き方改革、教科担任制等に関する視察も、全国から40団体150名ほど訪れた。多くのメディアにも取り上げられ、児童・保護者・教職員の励みとなった。オリンピック・パラリンピック推進校として、様々なゲストの訪問を受ける機会に恵まれた。児童にとってまたとない経験となった。		

重点取組分野	令和2年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
生きてはたらく知	①算数科におけるコース別学習に取り組み、子ども一人一人に合った学習を実現する。②重点研究のテーマを「探求的な活動を通して身の回りのひと・もの・ことに本気でかかわる生活科、横浜の時間」とし、教科横断的に取り組む活動を通して、主体的に学習しようとする態度を養う。	①算数科におけるコース別学習に取り組み、一人一人にあった学習を目指し取り組んだ。学年や単元によっては、ITなどの形態を用いて、学習を習熟させる取り組みも行った。②重点研究では、コロナ禍の状況を鑑み、プログラミングの研究に変更した。総合的な学習の時間においても、各クラス教科横断的に取り組み、学年に応じた資質・能力の向上を目指した。	B
豊かな心	①幼稚園・保育園との交流、地域の方との学習、学年同士の交流など他者と「つながる」教育を通じて「ありがとう」と言われる、言える経験を積み重ね、自尊感情、自己肯定感を育む。②Y-Pアセスメントを実施し、他を思いやる温かい学級風土を作る。	①オンラインや参加人数を減らすなど工夫して、地域の方や異学年での交流を行うことができた。今まで当たり前に行っていたことを振り返ることで、一つ一つの出会いや交流ができる喜びを感じ、それを大切にすることができた。②Y-Pアセスメント年2回を実施し、よりよい集団作りをする横浜プログラムを行うことで子どもたちのクラスの居心地をよくしようと努めることができた。	B
健やかな体	①地域人材の協力を得て、持続可能な運動や体操を継続して行い、体力と自己効力感の向上に取り組む。②養護教諭による性に関する授業や学校医を招き、話を聞くことを通じて自分の体について知る機会をもつ。③オリンピック・パラリンピックを活用し、運動の推進、障害者理解を推進する。	①休校中の課題として、体力向上の取組を提示することができたが、コロナ禍の状況を鑑み、地域との連携をとすることは難しくなった。②高学年においては、養護教諭や学校医による話を聞くことでより具体的に、自分の体について知る機会になった。③オリパラ推進校の期間や活動内容を明確にして取り組む。	B
児童生徒指導	①全学年で教科担任制を取り入れ、一人の児童に対して複数の教員が関わり、その子のもつ様々な側面を捉えながら、児童指導に生かすようにする。②多様化・複雑化する課題にも、チームによる指導で適切かつ迅速な対応ができるようにする。	①多くの職員で指導にあたることで、より深く児童を理解することができた。様々な場面で見せる児童の良い面を共有することができた。②学年、専任等チームで情報を共有しながら組織的に対応することで、課題を未然に防止したり、問題を解決することができた。	A
特別支援	①関係機関との連携を図り、個に応じた指導を行えるようにする。②子どもの特性の理解を深め、得意なことを引き出す支援につなげることで、自尊感情を育む。③個別の指導計画を作成し、子どもに関わるすべての教職員の共通理解を図るようとする。	①児童の困りに寄り添い、通級巡回指導や区役所等と連携をとりながら、より良い支援をチームで考え、児童支援につなげることができた。②研修を通して児童の特性の理解を深め、個々に適した支援を行うことができた。③ケース会議を生かして支援計画を立て、担任と特別支援教育COが協力して評価・修正をしながら、具体的な支援計画を作成した。	A
ICT活用	①主にプログラミング教育を通して、情報活用能力の育成を図る。②ICT支援員と連携し、積極的にICTを活用した授業を計画し、子どもの学習意欲を高める。③プロジェクトを活用し、デジタル教科書のアニメーションを見やすくしたり児童の考えを共有したりすることで児童の学習意欲を高める。	①プログラミング教育を通して、必要な情報の取捨選択ができるようになってきた。②プログラミング教育以外でもノートPCやタブレット端末を活用した授業を展開できた。児童がICT機器を活用する姿が日常化してきた。③プロジェクトを活用することで、テレビ画面では小さくなくても、共有しきれなかった情報を共有することができた。	A
地域連携	①近隣の幼稚園、保育園中学校と情報交換し、災害の状況を想定した訓練を行う。②地域の中の学校を実践するために地域の人材を積極的に活用する。③まちは、学校運営協議会、学校便り、学校HP等を活用して地域と「つながる」教育を行う。	①今年度は、コロナ禍の状況により近隣の幼稚園、保育園中学校と連携をとっての訓練は難しくなった。②コロナ禍のため、教科や単元を厳選し、感染症対策を考えた最小限での活用になった。③対面での機会を最小限にし、主に学校便りや学校HPを中心に活用し、学校の取組に対する理解と協力を得ることができた。	B
#REF!	#REF!		
#REF!	#REF!		
いじめへの対応	定期的なミニ面談やアンケートの実施により、児童のもつ様々な悩みに寄り添うことができた。また、年2回YP研修を行い、クラスの実態を把握するとともに、育て方を意識して授業を行った。②全職員で児童を見守り、小さな変化も共有しながら指導にあたることで、いじめの未然防止や早期発見・解決につなげることができた。	①定期的なミニ面談やアンケートの実施により、児童のもつ様々な悩みに寄り添うことができた。また、年2回YP研修を行い、クラスの実態を把握するとともに、育て方を意識して授業を行った。②全職員で児童を見守り、小さな変化も共有しながら指導にあたることで、いじめの未然防止や早期発見・解決につなげることができた。	A
人材育成・組織運営(働き方改革)	①チームマネージャーを活用した教科担任制を行うことで、学年の組織を強化すると共に複数の担任による教材研究や保護者対応を進められるようにする。②メンターチームでは、すぐに役立つ内容の研修を取り入れ、学級経営や授業に生かすことができるようにする。③会議の精選を行いつつも、情報ツール等を活用して必要な情報を全職員で共有し、効率的な学校運営を行うことができた。	①チームマネージャーを中心に、チームで教材研究や保護者対応に取り組むことができた。来年度はチームマネージャーをブロック主任と位置付ける。②メンバーが主体的に研修を進め、日常にかかわる研修になった。③会議の精選を行いつつも、情報ツール等を活用して必要な情報を全職員で共有し、効率的な学校運営を行うことができた。	B
ブロック内評価後の気づき	今年度は感染症対策から小中一貫教育に関する集まりが制限された。しかし、その中でも校長間のミーティングや各部会リーダー同士のメールでの情報共有を続けて行うことができた。また、校長ミーティングに学校運営協議会委員長にも参加していただき意見をもらうこともできたことも成果である。また、学校運営協議会を通じて「より適切な児童支援」個別支援学級における教育の充実「GIGAスクール構想の推進」に向けての人的支援の拡充を意見書として教育委員会に要望していたこともできた。次年度も、9年間育てる資質能力の向上を目指して地域、ブロック間で連携していきたい。		
学校関係者評価	「学校評価をもとに「児童の学校生活の満足度」「教科担任制の効果」「プログラミング教育の効果」について意見をもらった。教科担任制が児童の学習支援に有効であるという先生に困り感を相談できたりする良さがあることや今後も継続することについて評価していただいた。プログラミング学習については、次年度から始めるGIGAスクール構想の推進とあわせて、地域人材の活用についてはのアイデアをいただいた。また、学校としてチャレンジした好事例が充実したことも評価いただいた。今後は、好事例の紹介も振り返りの対象とし、形成的な評価も行うとよいとのアドバイスを受けた。		
中期取組目標振り返り	今年度は、感染症予防対策と並行しての学校運営となり、見通しが持てない中様々な行事を手探りでやってきた。ただ、その都度、教職員でよく話し合い、児童のよりよい学びを探ることができた。感染対策をとりながら、25周年事業を児童の手で実施できたこと、運動会を全校で実施できたことなどは大きな成果であった。また、体験学習を支援していただける地域の企業や大学、福祉団体とのつながりができたことも成果であった。地域の中で児童が体験的・主体的に学びを深めるための支援をいただくことができた。今後も地域とのつながりを大事にし、開かれた学校運営を行ってほしい。		

重点取組分野	令和3年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
生きてはたらく知	①算数科におけるコース別学習に取り組み、一人ひとりにあった学習を目指し学年や単元によっては、ITなどの形態を用いて、学習を習熟させる取組も行った。②重点研究では、各クラス教科横断的に取り組み、学年に応じた資質・能力の向上を目指す。	①第3学年より算数科におけるコース別学習に取り組み、一人ひとりの能力に応じてコースを選択できるようにしたことで、多くの児童が安心して学習に取り組むことができた。しかし、感染症の影響や指導者の勤務体制など年間を通して実施するための課題もあった。②重点研究では、情報機器を活用して教科横断的に学習に取り組み、学年に応じた資質・能力を身に付けることができた。	A
豊かな心	①オンラインや参加人数を減らすなど工夫して、地域の方や異学年での交流を行う。②Y-Pアセスメント年2回を実施し、よりよい集団づくりをする横浜プログラムを行うことで子どもたちのクラスの居心地をよくしようと努める。	①オンラインや参加人数を減らすなど感染対策をとりながら地域の方や異学年での交流を行うことができた。次年度はコロナ禍でも年間を通して持続可能な異学年交流の年間計画を作成し、より充実した交流ができるようにしていきたい。②Y-Pアセスメント年2回を実施し、子どもたちが居心地の良い学びづくりに努めることができた。また、その都度講師をお招きして職員研修を行い、学級づくりについての見識を深めることができた。	B
健やかな体	①コロナ禍の状況に鑑み、地域や家庭と連携を図りながら、持続可能な運動に取り組む。②高学年においては、養護教諭や学校医による話を聞くことでより具体的に、自分の体について知る機会にする。③オリパラ推進校の期間や活動内容を明確にして取り組む。	①横浜市スポーツ協会と連携し、体の柔軟性を高めるための運動に取り組んだ。次年度は家庭でも継続して取り組めるように、校内から家庭への発信方法を工夫したい。②宿泊体験学習の事前指導として養護教諭による話を聞くなどしたことで、具体的に自分の体について知る機会ができた。③オリパラ推進校とのオンライン交流を通してオリンピックに対する関心を高めることができた。	B
児童生徒指導	①多くの職員で指導にあたり、より深く児童を理解する。様々な場面で見せる児童の良さや課題を共有する。②学年、専任等チームで情報を共有しながら組織的に対応することで、課題を未然に防止したり、問題を解決したりする。	①全学年で教科担任制を行い、より多くの職員で児童指導、保護者対応にあたることができた。②毎月の三部会や職員会議等で各学年の児童指導に関する情報を交換し、児童指導専任を中心にチームで課題解決にあたる組織作りができた。	A
特別支援	①チームで児童に寄り添い、通級や区役所等と連携をとりながら、児童支援につなげるようにする。②子どもの特性の理解を深め、得意なことを引き出す支援につなげることで、自尊感情を育む。③個別の指導計画を作成し、子どもに関わるすべての教職員の共通理解を図るようとする。	①チームで児童に寄り添い、通級や区役所等と連携をとりながら、児童支援につなげることができた。②児童の特性の理解を深め、個々に適した支援を行う。③ケース会議を生かして支援計画を立て、担任と特別支援教育COが協力して評価・修正をしながら、具体的な支援計画を作成した。	A
ICT活用	①プログラミング教育を通して、必要な情報の取捨選択ができるようになる。②積極的に情報機器を活用した授業を展開し、児童がICT機器を活用する能力の向上に努める。③プロジェクトを使い、テレビでは共有しきれなかった一人ひとりの思考を共有し、学習意欲の向上に努める。	①プログラミング教育をベースにした各教科の学習を通して、必要な情報の取捨選択ができるようになり、各学年に応じた資質・能力の育成につなげた。②情報機器を日常的に活用した授業を展開し、児童がICT機器を活用することで、各教科での資質を向上させることができた。③一人一台のICT機器の普及により、意欲的に学習に取り組む児童が増えた。	A
地域連携	①近隣の幼稚園、保育園中学校と連携をとっての訓練を行う。②コロナ禍のため、教科や単元を厳選し、感染症対策を考えた最小限での活用になった。③対面での機会を最小限にし、主に学校便りや学校HPを中心に活用し、学校の取組に対する理解と協力を得られるようにする。	①近隣の幼稚園・保育園・中学校との合同引き取り訓練を行うことができなかった。次年度はコロナ禍での実施可能な避難訓練を行う。②感染症対策をとりながら可能な範囲で異校種や地域の方々との交流を実施した。③主に学校便りや学校HPを中心に活用し、学校の取組に対する理解と協力を得られるように努めてきたことで、一定数の理解は得られた。	B
#REF!	#REF!		
#REF!	#REF!		
いじめへの対応	定期的なミニ面談やアンケートの実施により、児童の様々な悩みに寄り添うようにする。また、年2回YP研修を行い、クラスの実態を把握するとともに、育て方を意識して授業を行った。②全職員で児童の見守りや早期発見・解決につなげる。	①定期的なミニ面談やアンケートの実施により、児童の様々な悩みに寄り添うようにする。また、年2回YP研修を行い、クラスの実態を把握するとともに、育て方を意識して授業を行った。②全職員で児童の見守りや早期発見・解決につなげる。	B
人材育成・組織運営(働き方改革)	①チームマネージャーをブロック主任と位置付け、チームマネージャーを中心に、チームで教材研究や保護者対応に取り組む。②メンバーが主体的に研修を進め、日常にかかわる研修にする。③会議の精選を行いつつも、情報ツール等を活用して必要な情報を全職員で共有し、効率的な学校運営を行う。	①チームマネージャーをブロック主任と位置付け、チームマネージャーを中心に、チームで教材研究や保護者対応に取り組むことができた。チームマネージャーの負担や、チームマネージャー不在の学年へのサポートが次年度の課題。②オンラインを活用してメンバーが主体的に研修を進めることができた。③会議の精選を行いつつも、情報ツール等を活用して必要な情報を全職員で共有することができた。	B
ブロック内評価後の気づき	コロナ禍が続くことで、ICTを活用した取り組みも様々なようになってきた。タレットの活用により、子どもたちの学びがそれぞれに合った方法で進められるようになってきている。今後さらに活用方法を研究し積極的に学習に取り入れていきたい。ただ、対面での懇談会やPTAの活動が制限される中で保護者同士の横のつながりがなくなっていることも憂慮される。また、保護者が校内に入り、子どもたちの活動を参観する機会も少なくなっている。その点でも次年度の教育活動をブロック内で共有しながら工夫して行って行くことが必要である。		
学校関係者評価	学校が楽しいと答える児童がおおくなっている反面、居場所がないと感じている児童や悩みを相談できず不安を抱えている児童にどう対応していくかを考えていかなければならない。社会が不安を抱えている状況の中だからこそ、学校が子どもたちにとって安心できる場所であるように取り組む必要がある。また、感染状況によりできなくなる行事も多くなるのは仕方ないことだが、行事を止めるだけではなく、できる方法を探して続けていくことが必要である。Withコロナとして、新しい形で、新しい行事を作っていくことも必要ではないか。次年度に向けてよりよい教育活動の在り方を模索してほしい。		
中期取組目標振り返り	コロナ禍においても体験的な学びを大事にし、全校遠足や宿泊体験学習の実施等できていることに取り組んできた。行事の内容の変更や縮小で十分な取り組みができなかったところもあるが、アンケート結果では学校生活に満足していると答えた児童が多かった。ただ、今後このような状況が続くと考えられることからさらに行事の実施方法を工夫していくことが必要である。また、学校に居場所がないと感じている児童が一部いることにも配慮し、どの子も安心して過ごせる学校づくりに引き続き取り組んでいく。		